

周防上関阿波屋客船帳の研究

——幕末・維新期の瀬戸内交易について——

森野 佐竹 昭 恵

はじめに

本稿では、山口県熊毛郡上関町粟谷家（阿波屋・粟屋）に伝えられた客船帳を紹介し、そこに見られる諸商品の動きを追うことで幕末・維新期のこの地域の流通の状況を明らかにしたいと思う。客船帳によつて商品流通のあり方を検討する試みについては、柚木学氏らによつて一定の評価がなされており、この西部瀬戸内地域に即しては豊田寛三氏の労作があら¹る。豊田氏は広島県竹原市忠海町の江戸屋と浜胡屋に伝えられた客船帳を分析され、すでに幕末期において安芸と伊予・豊後・周防諸国との間に藩領域を超えた日常的な流通、一つの生活圏の形成ともいえる姿を明らかにされた。

ここで取り上げる上関は周防の東界にあつて、北の熊毛半

島と狭い海峡をはさんで向き合う長島に位置する。多くの船が通過する上関海峡に面し、古来より瀬戸内海交通の重要な拠点であり、萩藩の御茶屋・番所が置かれて朝鮮通信使を迎え、また越荷会所も置かれていた²。その位置は安芸・伊予・豊後の結節点とも言うべき位置にあり、ここに伝えられた客船帳を分析することで、豊田氏の成果をさらに補うこともできるのではないかと考える。

客船帳を伝える粟谷家は現在も伝統的な町屋の構えを残し、上関を代表する建物の一つとなっている。粟谷佳代子氏のお話³では、明治期に当たる四代前の御当主まで客船帳に見える治右衛門を名乗っておられたという。宝暦の朝鮮通信使に關する史料も保存されており、古くからこの地で商いを行っていたらしい。しかし幕末維新期のこの地の廻船問屋のなか

でどのような地位にあったのかまでは判然としない。そのため粟谷家の客船帳から知られる取引の様相が、当該時期の上関における諸取引の全体像のなかでどう位置づけられるかなお課題であり、また今のところ取引の仕組みなどを伝える他の史料も収集しえていない。ここではまずなによりも客船帳に見られる諸商品の動きを紹介し、その意味を考えることを目的としたい。

第一章 阿波屋客船帳の記載 — その概要 —

1 客船帳の書誌ならびに取引記載例

客船帳は、上部に「御客帖」正面小口に「阿波屋治右衛門」と記された本体よりやや大きめの木箱に収められ大切に保存されている。客船帳本体は、縦一四・五センチ、横二二・三センチ、厚さ一九センチをはかる。横半帳仕立て三六丁（七十二頁）分を一周りにしそれを二五冊分綴って表紙を付けた大変厚いものである。総計一八〇〇頁にも及ぶが、取引先の地域別に個々の取引が記入されていて、地域の替わり目毎に空白頁を多くとっているため取引記載のある部分は三分の一程度にとどまる。

表紙に「御客帳」の表題と天保二年の年紀を記しているが、

内容から確認できる年代では弘化四（一八四七）年から明治一八（一八八五）年までが中心である。一部の取引（五日市）に「天保貳卯年改之」「但し此分前御客帳二有之」という注記があり、天保期のものらしい二〇件ほどを含む。これを加えたことで表題に天保二年と記したらしい。全体によく整理され、筆跡も似通っているとところから、ある時点で年々の取引の記録を地域別・年代順にできる限り整理しなおし、本帳を作成したのではないかと思われる。その時点はこの記録の終わりから間もなくではなからうか。少なくとも取引がある毎に次々に書き入れてきたような性質のものではない。なお裏表紙には「粟屋治右衛門」とあるが、木箱の「阿波屋」によつて本稿では「阿波屋客船帳」と称することにした。次に記載内容について、取引記載の一例を示す。

秋村

元治元酉三月十一日

佐々木力蔵殿

右者鯛煎百八拾七俵

銀九匁四歩五厘乘ニシテ

御売成候事

「秋村」は取引先の居所（山口県大島郡橋町秋）で、多くは寄

港した船の船籍地を示すもの。「佐々木力蔵」は取引先ないし船頭名。「元治元酉三月十一日」は取引の日付、「鱒煎百八拾七俵」は商品と数量、続いて金額を記載する。最後の「御売成候事」は取引の性格を示す。これが記載の完備したかたちである。

このうち、日付の年は十二支のみの場合が多く、しかも必ずしも年代順でないところもあつて年を確定できない場合もある。数量や金額の記載も有無・精粗、単価・総額等まちまちである。しかし概ねこのような内容で多くの取引が記録されていて、四〇年足らずの間、九九七例の取引事例を知る事ができる。さらに一事例に複数商品の取引を記す場合があり、それらを加算すると二二一六件となる。本稿では個々の商品の動きを知りたいのでこちらの方を総取引件数として以下の基本とする。

なお取引の性格を示すとした最後の部分であるが、そこでは「御売成候事」「御買成候事」「御商内相成候事」「相替相成候事」などの表現が見られる。ここでの売買の性格や実態については、例えば全くの買取りか仲介かなど慎重な検討を要するが、本資料からだけでは明確にできない限界もある。本稿では阿波屋を中心にとどのような商品がどこから入り、またどこへ出て行ったのか、まずは何よりそれを明らかにすることを課題としたい。

そこで取りあえず、阿波屋に商品が入った場合を「買入」、

阿波屋から出た場合を「売出」と表記区分し、これらの取引を再整理してみることにする。

取引相手が売却したという意味の「御売成候事」六三九例は阿波屋の「買入」に、相手が購入した「御買成候事」二六三例は「売出」に分類する。「御商内相成候事」二二六例については、荷物を運んできたという「積入」の表現をしばしば伴っており、また商品が取引先の特産物であることなどからこれも基本的に「買入」に分類する。ただし、「御商内相成候事」のうち複数商品を交換した「相替」の表現を伴う五二例、及び「相替相成候事」の二〇例などは他の例を参照してそれぞれの商品を「買入」「売出」いずれかに分類・加算し、それが不可能な場合はその他とした。

このほか、「入船」とあるだけの二六例は寄港したものの取引が成立しなかった可能性があり、記事の不足で取引内容が判然としないものなどを含めてその他に加えた。

以上の方針で整理したところ、総件数二二一六件のうち、「買入」八六一件、「売出」三〇五件、その他が五〇件となった。件数で見るとは圧倒的に「買入」が多い。取引額が全て明示されていればそれを数値化して考察の基本にすえることもできるが、それがかなわないので本稿ではこの取引件数を基本に検討を進めていくことにしたい。

2 取引対象地域と商品の種類

客船帳の記載は取引先地域別になっている。上関から東に向かつて、まずは周防大島から始まり、安芸・備後、讃岐をばさんで摂津まで、そこで反転して淡路・阿波・伊予に戻り、次に南の豊後・土佐・日向に向かう。続いて上関から西へ周防・長門を経て豊前以下九州に、最後に出雲・石見さらに僅かながら加賀に及ぶという順である。

その地域は見出しの付箋によって区分される。例えば最初の「大島」の付箋がついた部分では、仁賀満村銭屋安兵衛以下同村の者との三例五件の取引、続いて久賀村三件、戸田村二件と続き、秋村、伊豆井村で終わる。他に見える地名では波佐・横美・月見・沖家室・地家室・伊予田・平野・志佐・小松・土江・とのにう・由宇・三釜・西方・下田・平群などがある。厳密には大島のなかに加えるべきでない所や誤記・重複らしいものも含むが、そのような例は他国遠方の地域になるともう少し増えてくる。同じ村のなかでは年代順になっていることも多いがそれほど厳密ではない。結局「大島」のなかでは内訳として仁賀満村以下二二の取引先地名が見られ、取引件数は三七件となる。

客船帳自体は特に旧国別に地域区分しているわけではないが、冒頭の上関から東へ「大島」から「若国」までと、後半

の上関から西の「小郡」から「牛島」までの部分を合わせて周防国として集計すると、この見出しの付箋が一三となり（付箋があっても記載のないものは除く）、内訳として五八の取引先地名が見られ、取引件数合計が二三件となる。次の安芸国では、「小方」以下二九の付箋見出しがあり、内訳として九三の地名が見られ、取引件数は合計四六五件となる（因島を含む）。

付箋の区別が史料本来の地域区分であることは肝に銘じつつも、取引先を全て表示するわけにもいかないので、あえて旧国別に整理して表1に示した。周防を除いてほぼ記載の順

表1 旧国別取引件数

国名	付箋	内訳	件数	国名	付箋	内訳	件数
周防	13	58	123	豊後	4	29	65
安芸	29	93	465	土佐	1	5	13
備後	4	11	44	日向	1	5	12
備前	3	13	42	長門	3	11	20
讃岐	4	18	38	豊前	3	8	19
備中	2	4	11	筑前	1	4	5
播磨	1	12	23	肥前	4	13	17
摂津	2	9	14	肥後	1	1	1
大和	摂津の内		1	壱岐	1	1	3
紀伊	1	6	13	出雲	1	2	2
淡路	1	11	31	石見	1	2	3
阿波	1	6	12	但馬	1	2	2
伊予	19	59	236	加賀	1	1	1
				合計	103	384	1216

である。一〇八（五カ所は記載なし）の見出し区分のもと、実際の取引先地域は三八四カ所に及ぶ。総件数は二二一六件にとどまるので小規模な取引を数多くの地域と行っているということになる。

取引相手の国別集計では、安芸が最も多く伊予・周防・豊後の順にほぼ半減していく。見出しの区分数や内訳の取引先地名の多さもこれに対応しており、阿波屋がしばしば取引した相手の地域については詳しい区分がなされ、またそのような地域とは実際に津々浦々に及ぶきめ細かな取引が行われたことを示している。

取引先の地域的広がりや件数という点では、先に触れた安芸忠海の二つの客船帳でも伊予・讃岐・安芸に周防・長門・豊後が続くことが注目される。忠海と上関の位置を考えると上関では讃岐が少なくなることは予想の範囲内で、やはり西部瀬戸内地域に濃密な取引圏を想定することができそうである。一方、日本海側から北海道にかけての地域とは取引がほとんどなく、北前船との直接取引が行われていないことに留意しておきたい。

次に取引商品を見ておきたい。商品は二〇〇種類を越えている。本稿の末尾の付表に取引相手地域（国）別に「買入」「売出」にかけて全ての商品名を表示しておいたので、具体的な商品名などについてはそちらを参照していただきたい。

表2 商品別取引数（10件以上）

商品名	件数	「買入」	「売出」	その他	商品名	件数	「買入」	「売出」	その他
酒・銘酒	78	60	17	1	唐芋	15	15	0	
米	70	24	46		傘・笠	15	14	0	1
干鰯	63	19	44		生鯖	14	8	6	
鰯煎・煎	41	25	16		杉板	14	14	0	
みかん	34	32	2		生鱒	14	9	5	
塩	34	25	8	1	大豆	14	3	11	
目刺	29	22	6	1	あら物	14	14	0	
白砂糖	28	25	3		樫炭	13	11	1	1
篠巻	25	18	7		芋・上芋	13	13	0	
塩鰯	24	18	6		醬油	12	11	1	
板類	21	21	0		下駄	12	12	0	
麦安	19	10	9		塩鯖	12	6	5	1
繰綿	19	18	1		煙草	11	10	0	1
羽鯉	18	0	18		蒟蒻玉	11	10	0	1
素麺	18	12	5	1	茶	10	10	0	
縞木綿	10	2	8		合計	725	491	225	9

ここではもう少し整理してみたい。

表2に取引回数の多い商品をその順に示した。この場合、「豊前米」「越後干鰯」などの産地名や「文蝶印酒」などのブランド名などは捨象して米・干鰯・酒として計算したが、同じイワシでも「干鰯」「塩鰯」「目刺」（「鰯目刺」を含む）な

どは商品としての性格が異なると思われるのでそれぞれ別のものとして計算している。大きな項目に分類してしまうのではなく、なるべく記載に忠実に集計することを心がけた。

一番取引件数の多いものが酒で七八件、以下米七〇件、干鰯六三件と続く。しかし取引全体の件数に比べてそれほど多いとは言えず、その三品目合わせても二割に満たない。取引一〇件以上あるものでは三一種類に及ぶがそれを合わせても取引全体の六割である。阿波屋の取引は、先に見たように相手が細かく分散していたが、その商品においてもきわめて多様であったことがわかる。

さらに上位三一種について「買入」と「売出」にわけると、多種多様な商品はもっぱら「買入」の面に見られ、「売出」では数種類の主力商品に限られていることがわかる。これらは阿波屋の取引の性格を知る手がかりになりそうである。ただし先述のようにもともと総取引件数で「買入」は「売出」の約三倍になる。「売出」には高価なものが多いのでこれを金額に直すと均衡する可能性もないわけではないが、阿波屋の経営全体を考える場合は、客船帳に現れない例えば上関の問屋・仲買などとの取引を念頭におく必要がある。それは、廻船へ「売出」するための仕入れや廻船から「買入」れたのち売却する取引のことである。

次章では、引き続き表2にもとづいてそれぞれの商品の動

きを検討することから阿波屋の取引の性格を考えてみることにしたい。その際、幕末期と維新後に分けて検討したいのだが、先にも、先に紹介したようにかなりの取引例についてその年次を確定できない事情があるので、総体としての動向を見ることがから始めたい。

第二章 阿波屋の商品取引

1 上関とその周辺で消費するもの

まず、「買入」中心で「売出」がほとんどない商品から検討する。表2では、「みかん・白砂糖・板類・練綿・素麺・唐芋・傘・杉板・あら物・樫炭・苧・醤油・下駄・煙草・蒟蒻玉・茶」などである。

白砂糖と練綿を除くと（後述）、ほとんどが直ちに消費に向けられる日用品や食料品である。他国・他地域の廻船から「買入」れながら他国の廻船に売却されることなく、仲買・小売人等を通じて上関、及び周辺での消費に供されたものではないかと思われる。

天保一三（一八四二）年頃作成の『防長風土注進案』によると、上関には屋敷二七軒のうち「商人」が一三軒を占め、「諸国廻船都会之場所ニテ、不絶旅船繫泊仕、売買交易数

多御座候、主二間屋・中買・客屋商売之者多く、又ハ店屋等・中師・船手稼・風呂屋等ニテ渡世仕候事」とあり、港町の賑わいを伝えている。諸物資交易の場として多くの廻船・商人が訪れ、また寄港・宿泊する船乗りや旅人相手に多少贅沢な品物も必要で、上関近辺で生産できないやや高級なもの、あるいは特産地から安価なものを集めたのではないかと考える。なお上関の他の間屋を通じて他国船などに転売される商品の可能性もあるが、ここでは推測を重ねることは避ける。そのほほ確実なものは3で後述する。

右の品物に類似する取引一〇件以下のものも加えて一つずつみていこう。

「みかん」に類する果物類としては、九年保・橙・柿・生柿・(生柿類カ)

干柿・串柿・箱柿・つるし柿などを加えて六八件になる。二件を除いて全て「買入」である。みかんは明治になっての取引が多く、安芸中心だが豊後・伊予から紀州まで広く瀬戸内沿岸各地から集められている。柿でさえ遠くは讃岐丸亀や豊後鶴崎からもたらされている。次に「唐芋」は周防大島や伊予中島など島嶼部からで、小芋・大根・人参・椎茸・牛蒡・冬瓜などの野菜類も僅かずつ「買入」れている。椎茸は日向など、大根は安芸からもきている。

加工食品類として「素麺」は讃岐小豆島からが多い。「煙草」は備前下津井の船が「東城煙草」、周防三田尻の船が「豊

後煙草」を、「茶」は伊予宇和島の船が「土佐茶」、伊予真城や周防平生の船が「日向茶」をもたらすなどやや複雑である。「蒟蒻玉」は安芸・備後からで、さすがに「鯉節」は土佐からである。これらはほとんどが「買入」である。「醤油」は播磨赤穂や備前下津井が遠い方で、一方地元周防からは見えない。「酢」も僅かながら安芸五日市や備後尾道からもたらされている。

「板類」「杉板」に類する木材類は、松板や各種丸太・角材などを加えて六六件になる。安芸の玖波・廿日市・五日市などからが多く、遠くは紀州や淡路・讃岐の船で紀州杉板・杉丸太がもたらされている。炭類二四件では「樫炭」が土佐下田から、「松炭」は安芸玖波からが多い。木材類・炭類のほとんどが「買入」である。「傘」「荒物」「下駄」などの雑貨はいずれも広島城下からが圧倒的に多い。「桶屋物」「樽屋物」「漆物」も安芸からである。紙類も「ちり紙」八件のほとんどが安芸玖波からである。

敷物類では「備後表」七件が備後松永・箕島から、「筵」八件は「海田筵」の名が見えるように安芸海田近辺からで、売買の均衡する「七島筵」七件とは対照的である。「焼物」七件には肥前伊万里や石見浜田も見える。「藍玉」は阿波撫養から、「かき灰」も安芸の牡蛎生産地帯からである。「苧・上苧」のほか「古う苧」が扱苧とすれば、麻の半製品が二〇件

となり、そのほとんどが広島城下からの「買入」である。

以上、「買入」ばかりで「売出」がほとんどない商品の代表的なものについて、一〇件以下のものも含めて類似のものを合わせながら見てきた。

2 上関周辺での消費と、一部他国に転売するもの

続いて表2から「買入」中心ではあるが「売出」も多少あるものを見ておきたい。それは「酒・鰯煎・塩・目刺・塩鰯・篠巻・生鰯・生鰯・塩鰯」である。これらの多くも、先の商品と類似の性格、つまり上関周辺での消費等に供されたがその幾分かは他国・他地域の廻船に転売されたということが想定される。

まず「酒」から見ていく。「買入」六〇件のうち主要なところをあげると、遠くは摂津灘・大坂から七件あり「上酒」「白菊酒」などの表記も見える。備前下津井・備中玉島からあわせて九件、広島城下・五日市など安芸国から二二件と最も多く、伊予国では今治・粟井などから一二件である。一方「売出」し先は伊予や九州がほとんどを占めるが、伊予一三件のうちで穴井・真網代・宇和島など豊後水道に面したところに広がるのが特徴である。地元の酒では満足しない港町ならではの需要に依えて灘や広島船から酒を買入れ、その

一部はさらに伊予南部や九州に転売されていたのである。

次に食用に供されたと思われる海産物を検討する。最初に「鰯煎・煎」を見る。これは同じイワシでも「干鰯」とは書き分けられており食用の煎子であろう。伊予の宇和島・穴井や豊後佐伯・白杵の船から「買入」れ、その一部が安芸・讃岐・播磨などの船に「売出」されている。ちょうど右の「酒」とは逆の動きである。「目刺」「塩鰯」なども「鰯煎・煎」同様の動きを示すが、「売出」が少ないので上関周辺での消費も考えられる。「塩鰯」は地元周防のほか豊前・肥前・出雲から「買入」れ一部安芸・伊予に「売出」しているが件数は少ない。

「生鰯」「生鰯」の「生」はいわゆる活魚の可能性もあるが、取引時期が正月に集中している。腐敗しにくい時期を選んで、塩漬けなどに加工せずに正月用にそのまま取引したのかもしれない。総称するときはずっとあえず生魚としておく。「生鰯」は老岐、肥前唐津・平戸、豊後佐伯から「買入」れ、安芸の井ノ口や横浜の船に「売出」されている。件数が均衡しているのほとんど転売かもしれない。「生鰯」は老岐、豊後佐伯のほか周防大島や安芸横浜の船からも「買入」れており、備後箕島・備前下津井の船に「売出」されている。逆方向の動きも見せる安芸の横浜は漁業の盛んなところで、僅かながら「いか」「生鰯」「かなぎ煎」なども阿波屋にもたらし

ている。漁業だけでなく高級魚の売買にも関与していたのであろう。

食用海産物の取引は以上の二三四件のほか、鯛・鯉魚・鯨・あなご・いかなご・わかめ・ひじき・昆布などもあり、二〇〇件を上回る。その三分の二が「買入」で三分の一が「売出」である。この多くは上関の西方からもたらされて上関近辺の消費に供され、煎子の一部や高級魚はさらに東方に転売されたのである。先の「酒」とは逆の動きである。

以上の「買入」のみもしくは「買入」が多い商品の取引が、阿波屋の客船帳では過半を占めているのであるが、商品は西部瀬戸内を中心に相当広い地域から集められていることがやはり注目される。

3 北国への転売が想定されるもの

先の1と同じく他国の廻船から「買入」れながら他国の廻船に売却されることなく、しかも上関周辺で消費されたとは思えないものがある。上関の北国問屋など別の問屋を通じて北前船などに売却されたのではないか。先に留保した表2の「白砂糖」「練綿」がそれであり、ほかに「塩」「古手」などが考えられる。阿波屋は客船帳による限り北前船との直接取引がないのでこのような想定を行う。

明治一四年の北海道開拓使の調査報告によると、当時の上関と北海道との取引について次のような記述がある。⁵⁾

輸出ノ塩ハ本郡堅ヶ浜・大島郡小松開作等ヨリ、紙類ハ本郡小周防・三輪ノ近村及び都濃郡角村ヨリ、練綿ハ玖珂郡岩国及ヒ広島ヨリスルモノニシテ、多ハ北海道ヘ向ケ輸出ス。輸入ノ鮓メ粕・胴鮓・鯨鮓・昆布等ハ本郡ノ需要算スルニ足ラス、多ハ玖珂郡岩国及ヒ広島・伊予川ノ江辺ヘ転販セリ。

上関と向かい合う室津についても同様に塩と鮓メ粕などをあげて輸出入を記すが、さらに次のような記述がある。

砂糖類ハ讃岐、半紙類ハ当郡及ヒ都濃郡等、練綿ハ岩国・広島ヨリ輸入シテ是亦多ク北海道ヘ輸出ス。

つまり、練綿や砂糖は岩国・広島・讃岐から買入れて北海道に転売し、一方鮓メ粕などは北海道から買入れたのち岩国・広島・川ノ江に転売しているという。これは明治一四年の調査であるが、阿波屋客船帳の最後の時期に重なっている。阿波屋が扱った「白砂糖」は、二八件のうち二五件が「買入」、主要な買入れ相手は安芸能美一〇件・讃岐の高松など六件・伊予松前三件である。能美島は広島湾の島嶼部で廻船業の盛んなところであり実際は讃岐の砂糖を運んできた可能性もある。続いて「練綿」一九件のうち一八件が「買入」、主要な買入れ先は安芸沿岸の綿作地域で一四件を占める。

さらに「塩」三四件のうち二五件が「買入」、主要な買入相手は地元の平生・三田尻のほか、播磨・讃岐・安芸のうち製塩地と廻船業の盛んなところが多い。「売出」八件のなかに「播州塩」を豊前小倉の船に販売した例があり、やはり上関での消費のためだけに集められたものではない。

これに対して砂糖類には「地糖」が八件あるがすべて「売出」で、しかも相手先が安芸・讃岐・伊予と、原料糖が逆に流れている。「篠巻」も木綿の半製品であるが、備前下津井や伊予の廻船がもたらしたのち一部は伊予宇和島・豊後佐伯に転売されており「線綿」とは全く動きが異なる。

「白砂糖」「線綿」「塩」は、類似の商品とはかなり違う動きをしながら、しかも開拓使報告の記述にはほぼ符合しており、やはり上関の北国問屋などを通じて北前船に売却された可能性が高いのではないか。なお「古手物」六件のうち五件が広島城下などからの「買入」で、これも北前船が持ち帰る商品ではなかったかと考える。

これらは開拓使の報告によってその北国への動きを推測したわけであるが、ひるがえって先の1や2で上関とその周辺で消費されたとする商品のなかにも、このような上関の別の問屋を通じて他国・他地域の廻船に転売されたものが含まれている可能性は大きい。しかしそれはまた別の史料を得なければ確定することができないので、ここではこれらの区別を

このままに留め、本論の最後に多少の予測を加えたい。

さて、次は以上の1・2・3とは逆に、阿波屋客船帳で「買入」がないのに「売出」されている、もしくは「買入」より「売出」が多数を占めるものについて検討する。表2では「米・干鯛・羽鱈・大豆」などである。先の開拓使の報告を援用すれば、これには逆に他の北国問屋などを通じて仕入れたものが含まれているのではないかということになる。

4 北国からと想定される商品を転売するもの

まず「買入」がほとんどないのに「売出」されている「羽鱈」から検討する。「羽鱈」は一八件すべてが「売出」である。販売先は能美など安芸一〇件・中島など伊予五件・周防三件で先の開拓使報告の記述に合致している。いずれも綿作地帯に近接する地域であるが、廻船業者の多いところなので直接には廻船業者への販売と見る方が正確かも知れない。これは上関の北国問屋を通じて仕入れ、肥料需要のある地域へ販売されたものと考えざるを得ない。ただ「鱈粕」は六件しかなく動きも異なるし鱈鱈(数の子)も扱っていない。

5 北国からと想定される商品と北部九州・上関 周辺国からの商品を転売するもの

次に「買入」より「売出」が多数を占める「米・干鰯・大豆」を検討する。開拓使の報告では特にこれらに言及していないが、商品に冠された産地名を手がかりにする。

「米」は七〇件のうち阿波屋の「買入」が二四件、「売出」は四六件である。米に産地名が冠されたものはかなりあり、内訳は北から秋田二・庄内二・越後九・加賀二・筑前八・肥前二・唐津一・平戸一・豊前八・豊後四・備前一、さらに中国九・本国三・地米九となる。

阿波屋が実際に「買入」れた相手先は周防一件・豊前四件・伊予四件などで、周防からは「地米」「中国米」、豊前小倉からは「豊前米」、廻船業者の多い伊予中島からだけは「筑前米」「肥前米」とある。阿波屋が直接「買入」れた米にはこのように北国の米は見えない。一方、「売出」した相手先は安芸二七件、伊予一〇件と続くが、その米に先の「秋田」「越後」などの産地の米が見られるのである。従ってどうしても上関の北国問屋などから仕入れた米を販売したと考えざるをえない。なお、安芸国の販売先は能美一〇件・倉橋二件・江波二件など典型的な廻船業地域である。このあとさらに遠くへ転売されていた可能性もある。

「干鰯」にも産地名などの冠されたものが少しある。庄内一、越後五、角田三、石見二、伊州（荅岐）一、筑前三、長崎一、佐伯一、処四、地二である。

「干鰯（平子干鰯を含む）」は六三件のうち「買入」一九件・「売出」四四件である。阿波屋が「買入」れた相手先は安芸五件・豊後四件・伊予三件などで、豊後からは「処干鰯」とされるが、安芸からの干鰯は「筑前干鰯」とされるものがあり廻船業者が扱っているらしい。ここでも阿波屋が直接「買入」れた干鰯には北国の地名を冠するものがない。一方、「売出」した相手先は安芸三七件で圧倒的であるが、その干鰯に「越後干鰯」などが見られ、これも阿波屋が別の問屋から仕入れて販売したと考えざるをえない。なお詳しく売却先を見ると、肥料である干鰯は米とは違って五日市から呉にかけての綿作地帯に実際に販売されたようである。

同様に「大豆」は一四件のうち「買入」三件・「売出」一件であるが、買入れ先が安芸・伊予・豊後であるにもかかわらず、阿波屋から淡路・安芸・伊予などに販売した大豆のなかにやはり「津軽大豆」「肥後大豆」などが見える。

阿波屋は、上関の西方近隣の国々から米・干鰯・大豆などを多少は買入れ入っていたが、さらに上関の北国問屋から羽觴も含めて北国産のそれらを仕入れたうえ、多くは安芸など東方に転売していたのである。なお「綿木綿」一〇件のうち八

件が『売出』であるが、これは地域の産品である。

6 小括

本章では、阿波屋客船帳における商品毎の『買入』と『売出』の偏りに注目し、『買入』のみもしくは『買入』が『売出』より多い商品と、逆に『売出』のみもしくは『買入』が『買入』より多い商品とにまずは分けた。そして前者については、買入れたのち1上関とその周辺で消費するもの（みかんなど果物・野菜・素麺など加工食品・木材・傘など雑貨・筵など敷物）、2上関周辺での消費と、一部他国船に転売するもの（酒・煎子や生魚など食用の海産物）、3北国への転売が想定されるもの（砂糖・塩・繰綿・古手）の、三つの動きを想定した。次に後者については、4北国からと想定される商品を転売するもの（羽鯡）、5北国からと想定される商品に加えて北部九州・上関周辺国からの商品を転売するもの（米・大豆・干鰯などの肥料）とした。

また、それぞれ上関をはさむ東西各地の特産品がその地の廻船で運ばれて来ており、さらに各地の需要に応じてそれぞれ運ばれていったこと、芸予の島々の場合はしばしば専門の廻船業者を想定することも述べた。商品に即して改めて概観すれば、1・2の上関周辺で消費するもののうち、加工度

の高い製品にはその東方から運ばれてきたものが多く、広島城下の雑貨や小豆島の素麺、灘・大坂の酒などがある。対して原料的なものは同心円上のそれぞれの特産地から運ばれてきている。3の北国へ転売を想定されるものも東方からが多く安芸の繰綿や讃岐の白砂糖などがある。一方4・5の北国や北部九州からの商品では米と干鰯・羽鯡などの肥料が主力で、上関の東方、多くは安芸に運ばれている。

阿波屋の取引には直接現れない北国との取引を右のように加味することが許されるならば、この各種商品の動きは近世後期から明治初年にかけての上関の廻船問屋の姿を代表していると言ってもよさそうである。⁶

念のため脇坂昭夫氏の成果によつてほぼ同じ頃の備後鞆や安芸御手洗の事例と対比してみよう。⁷鞆は上関と同じく古い歴史を持つ港町である。一方御手洗は西回り航路の発展、そして瀬戸内の沖乗り航路の発達によつて生まれた新興の港町である。

まず鞆の商業について、脇坂氏はこれを中継的商業・買入れ商業・積み出し商業の三つに分け、北国米など他国船から買入れて他国へ積出す中継的商業が中心であること、干鰯などを領内近国へ卸す買入れ商業はその窓口独占が崩れていくものの、東城煙草など領内近国特産品の積み出し商業はなお維持されたとされる。

上関においても米の中継的商業はなお大きな位置を占めて

いる。干鰯については、北国産など別の問屋が買い入れ阿波屋はもっぱら安芸の各地に販売する役割であるが、上関が藩領域を越えて安芸への干鰯供給の直接の窓口の一つになっている点が注目される。また砂糖・塩・練綿などでは、阿波屋はもっぱら買い入れる役割であるが、瀬戸内各地の船から買い入れて別の問屋を通じ北国に積み出されることが想定される。なお積み出し商業の機能も保持していた。また上関および周辺での消費・販売に供される様々な日常生活物資も多く買い入れられている。このように鞆のあり方に類似の姿を上関に読み取ることが可能である。

次に御手洗の商業について、寄港する船への供給的商業も続くけれども北国米を中心とした中継商業が中心であり、一方領内近郷の商品積み出し機能などは弱いとされる。鞆に較べて積み出し・買い入れ商業の機能があまり見られないのである。このような後背地を持たないことがやがて御手洗港の急激な衰退をもたらすのであろう。

これに較べると、上関はやはりより鞆に近い性格を示している。また、米以外の商品の動きからは、阿波屋の取引相手先が安芸・伊予地域に偏ししかも津々浦々ときめ細かな取引を行っていることが注目される。豊田寛三氏が指摘した、安芸と伊予、安芸と豊後など西部瀬戸内海地域に日常生活物資をやりとりする「生活圏」ともいべき密接な関係の存在は、

この客船帳からもうかがえるのである。

むすびにかえて — 幕末から維新後への変化 —

さて、以上は客船帳の取引全体を一括して商品の動きから見てきたのであるが、最後に時間的変化についても考えてみたい。第一章でも述べたが、この客船帳の個々の取引の年次については多くは確定できない状態にある。しかし一部については年号が記入されている。また十二支しかないものでも取引金額を記していれば金・銀立てか円・銭立てかで時期を区別することが可能である。

そこで、年紀が明記された取引のうち明治四年までを「江戸期」、明治五年以降を「明治期」として分け、さらに年紀は記されていないが使用した貨幣を明記したものについてそれぞれ「江戸期」と「明治期」に分けた。実際の貨幣の切り替えは少し時代が下り、両者の時期区別が一致するわけではないがやむを得ない。それでもこの振り分け可能な取引例は全体一二六件のほぼ三分の一に過ぎず、「江戸期」は二〇八件、「明治期」は二五一件、合わせて四五九件となった。ただしこれは全体から無作為抽出したサンプルにはなっていない。例えば、全体では「買入」が「売出」の二・六倍であるが、この四五九件では二・二倍で「売出」件数が多い目に

偏している。もっとも内訳では『江戸期』一・九倍、『明治期』二・五倍で、一応『江戸期』より『明治期』において『買入』の比率がより高くなつたらしいことの推測はできる。

このような限界のあることを踏まえた上で、特に『明治期』の取引にどのような特徴が見られるのかを検討してみる。表3は、先の表1に示した旧国別取引件数を上位六位までとつて百分比で示し、『江戸期』『明治期』を添えたものである。『江戸期』の安芸・伊予への取引先の集中が緩和され、広く分散していったことがわかる。これを商品別に内容を確認してみると、取引の減少したものととして米(二〇→一一)・干鰯・木綿半製品(繰

綿・篠巻)・雑貨(一一→二)・木材・炭があり、増加したものととして食用の海産物(三〇→六三)・酒・果物(八→二一)・羽鱈・塩などがある。

さらに変化の大きい安芸との取引に限定すると、『買入』

表3 旧国別・時期別取引先の比率(%)

	全 体	『江戸期』	『明治期』
安 芸	38.2	48.6	26.7
伊 予	19.4	24.0	21.1
周 防	10.1	4.8	8.0
豊 後	5.4	1.9	6.8
備 後	3.6	1.4	13.2
備 前	3.5	5.8	6.8
そ の 他	19.8	13.4	17.6
取引件数	1216	208	251

(六〇→四〇の減)では、荒物・傘など雑貨、古手など衣料、酢・醤油など加工食品、繰綿・実綿など木綿半製品、松板など木材および炭が減少し、酒は横ばい、僅かに食用の海産物とみかんなどの果物類だけが増えている。『売出』(四一→二六の減)では、米や干鰯など主力商品が減じ、海産物は生魚から塩物に転じながら横ばいである。

以上のことから、米に代表される中継的商業の衰退、また安芸地域を後背地とした積み出し商業・買入れ商業、あるいは上関での消費についても衰退の途にあつたことを推測させる。ただ海産物については豊後・伊予と一部安芸からの塩鰯・目刺・生魚などを盛んに『買入』れ、さらに安芸・備後に『売出』しており、海産物取引の機能はむしろ増大した可能性が高い。またみかんなどの果物は先に上関周辺での消費に供されるとしたが、明治期になって北国への新たな商品として集められた可能性も考えられる。明治期に急減した木材類なども江戸期他国廻船への販売を想定するべきかもしれない。前章3で留保したことの一例である。

ここでは、客船帳の『江戸期』から『明治期』への変化を通じて阿波屋の取引、ひいては上関の機能の変化について検討を試みた。他国米の取引を制限するなどの流通統制は幕藩体制の崩壊によつて終止符を打ち、大坂米相場を中心に市場の統一が進みかつての投機的な米の中継商業はその基盤を失

つた。その他の諸商品も直接産地と消費地を結ぶ動きが強まるとともに、新たな物流ルートの再編成が進む。例えばこの地域では広島や尾道にその結節点が集約され、上関を経由する必然性は失われていく。しかし海産物や果物など、地の利を生かして新たな商品取引を開発する脈動はなお失われていないことには留意しておくべきであろう。やがてこの地域は漁業や柑橘栽培に途を開いていくのである。

注

- (1) 柚木学「海運史料としての入船帳と客船帳―廻船の航跡と商品流通―」(柚木学編『総論水上交通史』日本水上交通史論集第六卷、文献出版、一九九六年、初出一九八二年)、豊田寛三「幕末維新期の九州廻船と安芸芸海港」(柚木学編『九州水上交通史』日本水上交通史論集第五卷、一九九三年)、同「幕末明治初年の芸予交易」(大分大学教育学部紀要 第五卷第一号、一九七六年)。
- (2) 上関町史編纂委員会編「上関町史」一九八八年。
- (3) 谷沢明「瀬戸内の町並み」未来社、一九九一年。
- (4) 上関町教育委員会・上関町古文書解説の会「宝暦年中朝鮮通信使記録」一九九九年。
- (5) 「明治前期産業発達史資料」第二集、明治文献資料刊行会、一九五九年。
- (6) 北前問屋との取引を想定したが、北前船の荷物を預かり時宜を見て

売却するという視点からすれば萩藩が設けた越荷会所の存在も考えるべきであろう(小川國治「長州藩流通政策と上関越荷会所」山口大学教育学部研究論叢 第二五卷、第一部、一九七六年)。それも含めて上関港商業の全体像はなお課題である。

(7) 脇坂昭夫「近世港町の構造―安芸国御手洗港の場合―」(初出一九五六年)「近世港町の商流通―備後納の場合―」(初出一九六七年)「瀬戸内海地域史研究」第五輯、文献出版、一九九四年。

(8) この振り分け方について、同じ取引先地域に数多くの事例が記されている場合、最初の取引に年紀が明記されていればあとは十二支の記載のみでも年代は推定できる。また閏月の位置などからの推測も可能である。しかし第一章に述べたようにこの客船帳ではそのような例は多くはない。ここではなるべく統一した基準での振り分けにとどめた。

(9) 西向宏介「近世後期尾道商人の経営と地域経済―橋本家の分析をもとに」(地方史研究協議会編『海と風土』雄山閣、二〇〇二年)。

〔付記〕

本稿は二〇〇三年一月に広島大学総合科学部に提出された森野の卒業論文をもとにしている。本誌寄稿に際して改稿する必要が生じ、佐竹がその任にあたることになった。なお史料の閲覧・撮影をお許しいただいた粟谷成宣氏、粟谷佳代子氏、ご紹介いただいた安田和幸氏、井上美登里氏にあわせて心よりお礼申し上げます。

摂津	15	12	3	0	篠巻、かすり(大和国)、反物、酒、白菊酒、上酒、昆布、蝦ノ粕	
紀伊	13	11	1	1	芝粕、みかん、九年保、橙、五間板、緑綿、酒、塩二ツ切	
淡路	31	15	12	4	鰯煎、みかん、九年保、生香、紀州杉、杉六部板、杉丸太、杉角、塩二ツ切、筑前鰯燻、下駄	鮮ノ粕、地鰯燻、七嶋燻
阿波	12	7	5	0	切黒め、辛<き、鰯煎、藍玉	
伊予	236	149	72	15	干鰯、処干か、酒粕、鰯粕、唐砂粕、粟田粕、筑前米、肥前米、妻安、シヤカ、塩鰯、煎、鰯煎、平子煎、鰯目刺、目刺、生鰯、串鰯、かき老煎、かき老煎、きつ老仁、間物、生あな仁、九年保、橙、申柿、大豆、空豆、鷹芋、干芋、小芋、椎茸、牛蒡、生香、杉丸太、柿木さん板、椎波、松皮、篠巻、徳巻、牛蒡、白木綿、今津かすり、餅、小袖綿、古手物、酒、醬油、筑後油、油玉、鰯油、鰯油、土佐茶、白向茶、鰯香、黒砂燻、塩、五斗入塩、筑前鰯燻、生鰯、茶、ちり紙、半紙、七嶋燻、備後桑、苔、焼物、瀬戸物、四拾石漬船、かき灰、たふ木灰、白波、合栗	干鰯、佐伯干か、庄内干か、四ツ手干貨、羽鰯、干粕、油粕、地鰯、米、本回米、豊後米、豊前米、越後米、加賀米、庄内米、餅米、地麦、小麦、大麥、妻安、生魚、煎、平子煎、目刺、塩鰯、生鰯、このしる塩物、塩昆布、津輕大豆、肥後大豆、小豆、空豆、干芋、篠巻、稀木綿、酒、白砂燻、塩、七嶋燻
豊後	65	58	6	1	干鰯、処干鰯、塩鰯、煎、鰯煎、籠入鰯煎、豊後煎、目刺、鰯目刺、生鰯、鰯身欠、生鰯、鰯魚、生いな、生あな仁、間物取合、いか、みかん、橙、干柿、岡大豆、掛木、煙草、七嶋燻、羽阿い、佐伯鰯	妻安、篠巻、小倉帚、酒
土佐	13	10	2	1	赤身鰯、橙皮、黒砂燻、鰯煎、半紙ちり紙	稀木綿、下り物
日向	12	11	1	0	干鰯、塩鰯、目刺、生小鰯、鰯魚、塩阿い、間物、椎茸、櫻木角、樺木	足袋取合
長門	20	16	3	1	干鰯、清未米、筑前米、鰯煎、塩鰯、干いか、昆布、三ツ石昆布、黒め、九年保、杉角、澤亀、醬油、油、塩、松綿	干いか、緑綿、酒
豊前	19	16	2	1	平子干か、油粕、豊前米、(八)米、餅米、塩鰯、生鰯、切昆布、鰯油、黒砂燻、網塩物	播州塩、菜種
筑前	5	3	2	0	筑前米、椎波、鰯煎	澤亀酒、嶋木綿
肥前	17	16	0	1	処干鰯、油粕、肥前米、生鰯、塩鰯、生鰯、鰯身欠、若め、椎茸、ちり紙、焼物	
肥後	1	0	0	1	生鰯、生鰯、唐油	
豊後	3	3	0	0	塩鰯、黒砂燻	
石見	2	2	0	0	塩鰯、黒砂燻	
出雲	3	3	0	0	塩鰯、焼物	
但馬	2	1	1	0	干鰯	菜種
加賀	1	1	0	0	干印酒	